

◆新造船「涼かぜ」が2月1日に就航

—国道九四フェリー株式会社—

大分県佐賀関と愛媛県三崎の九州～四国間の最短航路を70分で結ぶ

2月1日に国道九四フェリー株式会社の新造船「涼かぜ」が就航した。

1月30日には、一般向け内覧会が大分県佐賀関で行われ、本組合から漢那太作九州関門地方支部長が訪船し、「涼かぜ」の運航を担う藤田哲也船長や古代昭浩船長をはじめとする乗組員を激励した。

「涼かぜ」の外板カラーは、白い船体に太陽と海を連想させるイエローとブルーが調和し、見る人に元気を与えてくれるようなデザイン。船名の「涼しい風」に符号する爽やかさを感じさせてくれる。内覧会では、徹底した新型コロナウイルス感染症防止対策を行いながら、船内の客室や船橋が紹介された。

2月1日、大分県佐賀関～愛媛県三崎間を結ぶ国道九四フェリーに、新造船「涼かぜ」が華々しく就航した。新造船「涼かぜ」は、同航路で活躍した「遥かぜ」の代替船で、その名の由来は、引退した遥かぜの「かぜ」を継承し、涼やかな海風をイメージして名づけられた。

本船の総トン数は1148トンで、バリアフリーに対応する設備となっているほか、キッズスペースやマッサージチェア室を完備し、あらゆる年代の利用客が安心・快適に過ごせるよう工夫が施されている。

外観の船体塗装も一新し、二階構造からなる客室内装もフロアごとにテーマを設け、それぞれのフロアで趣が異なる独自の個性的な空間が広がっている。

二階客室はテーマを「元気さ」とし、全体的に明るく、様々な色合いを採用している。座席シートは、大分県と愛媛県を代表するキャラクターや、海の生き物でにぎわっており、好きな色を選んで座ってほしいとの思いで仕上げられた空間である。

一方、三階客室はテーマを「スマートさ」とし、モダンな照明とフロアデザインを採用することで、大人の空間を演出したラグジュアリーな造りとなっている。

テーマが異なる2つの空間を結ぶ吹き抜けは、元気さの象徴として、ボルダリングブロックを銀河系に見立て、元気さとスマートさの2空間をうまく結びつけるよう工夫が散りばめられている。

三重野雄資代表取締役社長は「船体外観と内装を初めてのデザインとしたほか、幅広い年齢層のお客様が快適に過ごせるよう設備の充実化に力を入れた。コロナ禍が収束すれば、1時間毎のダイヤで構成する航海時間70分という最短航路の利便さと、この船の魅力を一人でも多くの方に知ってもらうことで、涼かぜファンが生まれ、地元にも貢献できる会社になる」と涼かぜに対する期待と自信をのぞかせた。

九州と四国を最短で結ぶ国道インフラとして、物流と旅客輸送の一翼を力強く担う「涼かぜ」の今後の活躍が期待される。

「海員だより」